

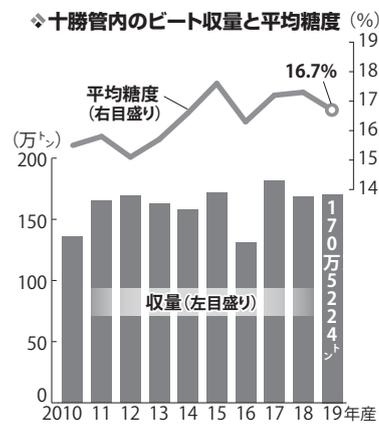
十勝ビート全道1位 19年生産量、3年連続で 寒暖差少なく糖度は16.7%

2020年1月22日

十勝管内の2019年産ビートの生産量は前年比1.2%増の170万5224トンとなり、3年連続で全道1位となった。全道の約43%を占める。糖度は収穫期の寒暖差が少なく、前年より0.6ポイント低い16.7%だった。



生産量が全道一となった十勝産ビート（日本甜菜製糖茅室製糖所、昨年10月）



道農政部がまとめた。ビートは砂糖の原料で、十勝とオホーツクの2地区で全体の85%を占める。

十勝の生産量は過去10年で3番目の水準。市町村別でみると、帯広市（22万7344トン）、音更町（20万4867トン）、芽室町（20万1185トン）の順が多かった。管内の1ヘクタール当たりの最多収量は中札内村の80.66トン。

収量と併せて農家収入の基準になる糖度の管内平均は16.7%。3年ぶりに17%台を割った。ビートは秋口の寒暖差で糖度が上昇するが、昨年は最低気温が高かったほか、収穫期の雨もあって水分を含んだとみられている。管内で17%台は上士幌（17.1%）、清水（同）、士幌（17%）の3町のみだった。

道内全体の生産量は10.3%増の398万5589トン。糖度は0.4ポイント減の16.8%だった。北見市（24万9570トン）が生産量で道内最多となった。

道農政部によると、全道的に6月以降の気温が平年より高く推移し、根の肥大が順調に進んだことで生産量が増加した。

小豆作付け 15%上積み 20年産指標面積

2020年2月8日

道農協畑作・青果対策本部は2020年産の畑作物作付指標面積をまとめた。道産の引き合いが増している小豆は約15%上積みし、全道ベースでは2万2500ヘクタールに設定した。同じく需要の高い小麦、ジャガイモも計画面積より高く設定している。

◆2020年産の主な畑作物作付指標面積

※単位：㌥（）内は計画面積比の増減率。
麦類は2021年の作付面積。

	全道	十勝
秋まき小麦	10万1218 (0)	4万0861 (0)
春まき小麦・大麦	1万9000 (+7.5%)	779 (+7.5%)
大豆	3万6369 (0)	8910 (0)
小豆	2万2500 (+15.2%)	1万5582 (+15.2%)
（生食用）	1万4900 (+0.5%)	6217 (+0.5%)
ジャガイモ（加工用）	1万5600 (+0.8%)	9928 (+0.8%)
（でんぷん原料用）	1万5500 (+2.3%)	4877 (+6.7%)
（種子用）	5100 (+0.8%)	2161 (+0.8%)
ビート	5万7841 (0)	2万5224 (0)

作付指標面積は作付面積の目標となる数値。各JAが農業振興計画で設定する計画面積を基に、需給の動向やJAの意向も含めて決めている。秋まき小麦については播種（はしゅ）を終えた後の公表になるため、翌年産の作付指標を示している。

小麦は特にパンや中華麺用品種の需要が高く、作付け拡大が求められている。春まき小麦・大麦は全道で、計画面積比7.5%増の1万9000ヘクタールに設定。十勝でも7.5%高い779ヘクタールとなっている。単収向上に向けて、排水対策の徹底など基本技術の励行も呼び掛けている。

豆類のうち小豆の20年産指標面積は全道で2万2500ヘクタール、十勝で1万5582ヘクタールに設定。いずれも計画面積より15.2%高い。近年、価格が安定している大豆の面積を増やす動きがあった中で、16年台風による不作が重なり在庫が減少。2022年には原料原産地表示が義務化されることを受け、道産小豆へのニーズが高まっている。

昨年産も計画より24%ほど高い2万2000ヘクタールの指標面積（全道）を設定したが、実際には2万400ヘクタールの作付けにとどまった。国の生産支援策も受け、さらに面積を増やす目標設定とした。

大豆は全道で3万6369ヘクタール、十勝は8910ヘクタール。計画面積と変わらない数値だが、納豆系小粒品種の需要が高まっている。

ジャガイモはポテトチップスなどの加工用で、輸入用から置き換える需要が強くなり、計画面積比0.8%増の1万5600ヘクタール（全道）。でんぷん原料用も2.3%高い1万5500ヘクタールとしている。